CPA 公認会計士講座

企業法（短答対策問題集　上巻）

目　次

第 1 章　会社法総論	2
第 2 章　機関	6
第 3 章　株式	140
第 4 章　設立	232

企業法の短答対策問題集の使用方法について

1. 企業法の短答問題の正答率を高めるために

企業法の短答問題は，他の科目（理論科目）の短答問題に比べて解きやすく点数を取りやすいという性質を有する。その理由は，① ほぼ条文からの出題であり条文の文言がそのまま出題される，② 条文にはその規定が存在する理由（趣旨）の記述はなく，その趣旨は解釈によるところも多いため問題で出題されることはないという２点である。

したがって，みなさんが最終的に企業法の短答問題の正答率を高めるためには，条文の内容（結論）をどれだけ多く暗記して，出題された肢について「○」，「×」という正誤判断をすることができるか，すなわち，**条文の内容を網羅的，かつ，正確におさえるということが重要**なのである。

しかし，企業法の出題範囲の大部分を占める会社法については全979条あり，その他商法や金融商品取引法と幅広く学習していかなくてはならないし，似ている条文も多々存在するので，**暗記だけで企業法について高得点を取ることは非常に困難**である。

そこで，それぞれの条文の趣旨を理解し，似ている条文（制度）を比較し，関連付けながらひっかけのポイント（特に典型的なものから）をおさえるということが，企業法において合格点を取るためにまずやらなければならないことである。以下では，**（１）条文の趣旨を理解する，（２）似ている条文（制度）を比較し，関連付けながらひっかけのポイントをおさえる**という２点について説明していく。

（1）条文の趣旨を理解する

条文の趣旨を理解することで，条文の内容をその趣旨やイメージを前提におさえることができるので，**多くの条文を効率的に暗記することができ，さらに頭に定着させることができる（つまり忘れにくくなる）**。

したがって，みなさんは，テキスト，短答対策問題集を学習する際も，その規定が誰のためにあるのか（株主保護，会社債権者保護，第三者保護，会社の利益保護），なぜそのような機関や制度が存在するのか等という点について，強く意識して学習するようにしてほしい。

そして，**最後の２か月間は，今までの理解を土台に条文の内容を覚えまくってほしい**。なぜなら，最終的にはいくら理解をしていても暗記していなくては問題が解けないからである。最後まで，理解に時間を使い，短答式試験までに覚える時間がなかったという状態にならないように注意してほしい。

（2）似ている条文（制度）を比較し，関連付けながらひっかけのポイントをおさえる

企業法の出題範囲には，似ている条文（制度）が多く存在しているため，試験中に混乱しないためにも，日々，似ている条文（制度）を比較し，関連付けながら学習する必要がある。また，実際の短答式試験においても，短答問題集で問われるような典型的なひっかけのポイントが多く出題されることから，合格点をとるためには，そのひっかけのポイントを，試験中にひっかからないようにおさえる必要がある。

似ている条文（制度）について，例えば，株式会社の機関には株主総会，取締役会，監査役会，監査等委員会，指名委員会等といった会議体が存在するが，それぞれについて，招集の省略の規定は存在するか，決議の省略の規定は存在するか，報告の省略の規定が存在するかと，**比較しながら関連付けておさえることによって，効率的におさえることができるし，忘れにくくなる**ので試験中に混乱することもなくなるであろう。このように，**似ている条文（制度）については，講義の中でも指摘していくので，意識するようにしてほしい**。

そして，そのうえで，ひっかけのポイントをおさえていってほしい。この短答対策問題集を配布する目的は，講義に指摘したひっかけのポイントを，問題演習形式で触れることにより，その**ポイントを覚えること**にある。どれだけ，知識をインプットしていたとしても，問題のひっかけポイントにひっかかってしまっていたのでは点数を取ることができないため，**短答対策問題集をただこなすのではなく，「ひっかけのポイントをしっかりおさえる」という気合いをもって解くようにしてほしい**。

2. おさえる程度（レベル感）を間違わないこと

短答問題集に限らずテキストの読み込みについても同様のことがいえるが，学習する際に注意しなければならないのは，**おさえる程度（レベル感）を間違わないこと**である（重要）。もっと具体的に言えば，「**短答式試験当日において，類似の問題が出題された際に正しく正誤判断ができること**」を目標として，このレベル感でのおさえこみをしなければならない。これがつかめていない状態だと，答練または本番の短答式試験において短答問題集と全く同じ問題が出題されたとしても，正しい正誤判断をする実力は身につかない。**「まさか」と思うかもしれないが，仮に短答問題集を10回転した場合でも，おさえる程度が間違っている場合は，類似の問題に対応することができない**のである。まずは，この点をしっかり認識してほしい。

以下，日々受講生と相談を受けることで感じる，陥りがちな状態を２点紹介する。くれぐれも，以下のような状態にならないように注意してほしい。

（1）目標が「短答問題集を解くこと」になりがち

「短答式試験当日において，類似の問題が出題された際に正しく正誤判断ができること」を目標にするなんて，当たり前じゃないかと思うかもしれないが，**知らぬうちに目標が「短答問題集を解くこと」になってしまっている受講生が非常に多い**。つまり，どんな解き方であっても，何回転かすれば，同じ問題なんか間違わないだろうと思ってしまっている受講生が非常に多いと感じる。確かに，ある教材を反復することは知識を定着させるために非常に重要で，欠かせないプロセスである。ただ，正しい目標を前提にした反復でないと，いくら反復しても同じ問題を間違う，つまり，なかなか点数が取れないという状態が続いてしまうので，注意が必要である。

（2）「その場で正しく正誤判断できたか」に重点を置きがち

短答問題集を解く際に，「**その場（短答式試験会場ではなく，短答問題集を解いている場）で正しく正誤判断できたか」に重点を置いてしまっている受講生も非常に多い**。短答問題集の構造は，１問１答形式なので，左のページに問題，右のページに解答解説が載っている。つまり，右を見れば答えがあるし，そもそも，「正しい」，「誤り」の２択なので，適当に「何か正しそうだな」，「何か間違ってそうだな」という感じで右を見ても確率的に半分は当たるのである。また，講義を受けた後やテキストを読んだ後だと，さらに，その内容が頭に残っている状態になるので，正答率は適当にやっても，７・８割と高くなることだろう。この時に，**「その場で正しく正誤判断できたか」に重点を置いてしまうと，曖昧なおさえになっているにも関わらず，短答式試験会場でも正しく正誤判断できる状態になっていると誤解してしまう**のである。

しかし，本番は当然右を見ても答えはないし，４肢の中から正しい文章を的確に２つ選ばなければならないのである。短答対策問題集に載っている問題（またはその類似問題）が，**短答式試験当日に４肢の中に組み込まれている状態をイメージし，短答式試験当日に自信を持って正誤判断できる状態になっているか否かということを，日々意識**しながら学習してほしい。

その場で正誤判断できたか否かはどうでもよい。極論，全部間違っても，二度と間違わないようなおさえこみがその場でできればよいのである。大事なのは，「**短答式試験当日において**，正誤判断できる力を身につけること」ということ忘れないようにしてほしい。

3. 解く回数とタイミング

短答対策問題集については，最終的には，**短答式試験までに，すべての「肢」について，正誤判断でき，その理由を説明できるようにしてほしい**。

具体的には，**講義を受講した後すぐに**講義で取扱った論点の問題を解くことを徹底してほしい（１回転目）。そして，**短答基礎・応用答練までに**，短答対策問題集を答練の範囲について**再度解いてほしい**（２回転目）。

また，短答対策問題集は，**短答式試験までに，すべての「肢」について，正誤判断でき，その理由を説明できるようになるまで，解き直す必要がある**ため，短答式試験までに必ずもう１回転してほしい**（最低でも合計３回転）**。もちろん，３回転しても間違えている問題については，定期的に確認をし，できるまでやり直す必要がある。

4. 情報の一元化

情報を一つの資料に集約することにより，効率的に学習できるため，短答問題集を解いてみて，**「新たに気づいたこと」や「肢の正誤判断を間違えた理由」などは，必ずテキストに書き込んでおいてほしい**。なぜなら，ひっかけのポイント等の書き込みがテキスト，ノート，条文，短答対策問題集等に散在してしまうと，復習する際にその書き込みを見落としてしまうことが想定されるだけでなく，復習する時間も多くかかってしまうからである。

よって，短答対策問題集を解いて得た新たな知識は，テキストに一元化するようにしてほしい。

5. 短答対策問題集の重要度

短答対策問題集の重要度は，**出題可能性と難易度を総合的に判断して付している**が，重要度Ａと重要度Ｂには大きな相違はないので，**重要度ＡとＢの問題**については，**すべての正誤判断ができるようになってほしい**。

その一方で，重要度Ｃの問題は，出題の可能性が低い，もしくは出題されたとしても難易度が高いため正答率が低くなることが想定される問題である。企業法は高得点を狙うことができるという性質上，基本的には，すべての正誤判断ができるようになってほしいが，重要度Ｃの問題は，たとえ短答式試験において出題されたとしても，合否に大きな影響はないと考えられる問題である。よって，時間に余裕のない受講生に関しては，重要度Ａと重要度Ｂの正誤判断ができるようになることを優先するようにしてほしい。

【ＭＥＭＯ】